

# 二人の役人

宮沢賢治

青空文庫



その頃の風穂の野はらは、ほんとうに立派でした。

青い萱や光る茨やけむりのような穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗の木やほんの木の小さな林もありました。

野原は今では練兵場や粟の畑や苗圃などになってそれでも騎兵の馬が光ったり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通つてもなかなか奇麗ですけれども、前はまだまだ立派でした。

九月になると私どもは毎日野原に出掛けました。殊に私は藤原慶次郎といつしよに出て行きました。町の方の子供らが出て来るのは日曜日に限っていましたから私どもはどんな日でも初草や栗をたくさんとりました。ずいぶん遠くまでも行つたのですが日曜には一層遠くまで出掛けました。

ところが、九月の末のある日曜でしたが、朝早く私が慶次郎をさそつていつものように野原の入口にかかりましたら、一本の白い立札がみちばたの栗の木の前に出ていました。私どもはもう尋常五年生でしたからすらすら読みました。

「本日は東北長官一行の出遊につきこれより中には入るべからず。東北庁」

私はがっかりしてしまいました。慶次郎も顔を赤くして何べんも読み直してました。

「困ったねえ、えらい人が来るんだよ。叱られるといけなからもう帰ろうか。」私が云いましたら慶次郎は少し怒って答えました。

「構うもんか、入ろう、入ろう。ここは天子さんのところでそんな警部や何かのどこじやないんだい。ずうつと奥へ行こうよ。」

私にもわかに面白くなりました。

「おい、東北長官というものを見たいな。どんな顔だろう。」

「鬚もめがねもあるのさ。先頃来た大臣だつてそうだ。」

「どこかにかくれて見てようか。」

「見てよう。寺林のそこはどうだい。」

寺林というのは今は練兵場の北のはじになっていますが野原の中でいちばん綺麗な所でした。はんのきの林がぐるっと輪になって中にはみじかいやわらかな草がいちめん生えてまるで一つの公園地のようでした。

私どもはそのはんのきの中にかくれていようと思ったのです。

「そうしよう。早く行かないと見つかるぜ。」

「さあ走つてこう。」

私どもはそこでまるで一目散いちもくさんにその野原の一本みちを走りました。あんまり苦くるしくて息いきがつけなくなるととまって空を向むいてあるきまたうしろを見てはかけ出し、走つて走つてとうとう寺林についたのです。そこでみちからはなれてはんのきの中にかくれました。けれども虫がしんしん鳴き時々鳥が百疋びきも一かたまりになってざあと通るばかり、一向いっこう人も来ないようでしたからだんだん私たちは恐こわくなくなつてはんのきの下の萱かやをがさがさわけて初茸はつたけをさがしはじめました。いつものようにたくさん見附みつかりましたから私はいつか長官ながかんのことも忘れてしきりにとつておりました。

すると俄にわかに慶次郎けいじろうが私のところにやつて来てしがみつきました。まるで私の耳のそばでそつと云いつたのです。

「来たよ、来たよ。とうとう来たよ。そらね。」

私は萱かやの間からすかすようにして私どもの来た方を見ました。向むこうから二人の役人やくにんが大急おおいそぎで路みちをやつて来るのです。それも何だかみちから外それて私どもの林へやつて来るらしいのです。さあ、私どもはもう息いきもつまるように思いました。ずんずん近づいて来たのです。

「この林だろう。たしかにこれだな。」

一人の顔の赤い体格のいい紺の詰えりを着たほうの役人が云いました。

「うん、そうだ。間違いないよ。」も一人の黒い服の役人が答えました。さあ、もう私たちはきつと殺されるにちがいないと思いましたが。まさかこんな林には気も付かずに通る過ぎるだろうと思っていたら二人の役人がどこかで番をして見ていたのです。万一殺されないうにしてももう縛られると私どもは覚悟しました。慶次郎の顔を見ましたらやつぱりまつ青で唇まで乾いて白くなっていました。私は役人に縛られたときとつた藪を持たせられて町を歩きたくないと考えました。そこでそつと慶次郎に云いました。

「縛られるよ。きつと縛られる。きのこをすてよう。きのこをさ。」

慶次郎はなんにも云わないでだまつてきのこをはきごのまま棄てました。私も籠のひもからそつと手をはなしました。ところが二人の役人はべつに私どもをつかまえに来たのもないようでした。

うろろう木の高いところを見ていましたしそれに林の前でびたつと立ちどまつたらしいのでした。そしてしばらく何かしていました。私は萱の葉の混んだ所から無理にのぞいて見ましたら二人ともメリケン粉の袋のようなものを小わきにかかえてその口の結び目を立

つたまま解といているのでした。

「この辺へんでよかろうな。」一人が云いいました。

「うん、いいだろう。」も一人が答こたえたと思おもうとバラツバラツと音がしました。たしかに何か撒まいたのです。私は何を撒まいたか見たくて命いのちもいらぬように思おもいました。こわいことはやっぱりこわかったのですけれども。

役人やくにんどもはだんだん向むかうの方かたへはんの木の間まを歩あきながらずいぶんしばらく撒まいていましたが俄にわかに一人が云いいました。

「おい、失しつぱい敗ぱいだよ。失しつぱい敗ぱいだ。ひどくしくじった。君きみの袋ふくろにはまだ沢たく山さんあるか。」

「どうして？ 林はやしがちがったかい。」も一人が愕おどろいてたずねました。

「だって君きみ、これは何なにという木きかしらんが、栗くりの木きじゃないぜ、途とほ方ほうもないとこに栗くりの実みが落おちてちや、ばれるよ。」

も一人が落おちついた声こゑで答こたえました。

「ふん、そんなことは心しんぱい配ぱいないよ、はじめから僕ぼくは氣きがついてるんだ。そんなことまで何なにのかんの云いうもんか。どつから来きたろうって云いったら風かぜで飛とばされて参まりましたでしよ  
うて云いやいいや。」

「そんなわけにも行くまいぜ。困こまったな、どこか栗の木の<sup>こま</sup>下でまこう。あ、うまい、こいつはうまい。栗の木だ。こいつから落ちたということにすりやいいな。ああ助たすかった。おい、ここへ沢山たくまいておこう。」

「もちろんだよ。」

それからばらっぱらつと栗の実が栗の木の幹みきにぶつつかったりはね落ちたりする音がしばらくしました。私わたくしどもは思わず顔を見合せました。もう大丈夫だいじょうぶ役人やくにんどもは私たちを殺ころしに来たのでもなく、私どもの居いることさえも知らないことがわかったのです。まるで世界せかいが明るくなったように思いました。

遁にげるならいまのうちだと私たちは二人一いっしょ緒しよに思ったのです。その証しょうこ拠こには私たちは一寸眼ちよつとめを見合せましたらもう立ちあがってしまいました。それからそおつと萱かやをわけて林はやしのうしろの方へ出ようとなりました。すると早くも役人やくにんの一人が叫さけんだのです。

「誰だれか居いるぞ。入るなつて云つたのに。」

「誰だ。」も一人が叫びました。私たちはすっかり失策しくじつてしまったのです。ほんとうにばかなことをしたと私どもは思いました。

役人はもうがさがさと向むこうの萱かやの中から出て来ました。そのとき林の中は黄金きんいろの日



光で点々になつていました。

「おい、誰だ、お前たちはどこから入つて来た。」紺服こんぷくのほうの人が私わたくしどもに云いいました。

私どもははじめまるで死しんだようになっていましたが大んだん近くなつて見ますとその役人の顔はまつ赤かでまるで湯気ゆげが出るばかり殊ことに鼻はなからはぶつぶつ油汗あぶらあせが出ていたので何だか急きゆうにこわくなくなりました。

「あつちからです。」私はみちの方を指さしました。するとその役人はまじめな風で云いました。

「ああ、あつちにもみちがあるのか。そつちへも制札せいさつをしておかなかつたのは失敗しつぱいだつた。ねえ、君きみ。」と云いながらあとからしなびたメリケン粉こふくろの袋ふくろをかついで来た黒服に云いいました。

「うん、やつぱり子供こどもらは入つてるねえ、しかし構かまわんさ。この林からさえ追い出しとけあいんだ。おい。お前たちね、今日はここへ非常ひじょうなえらいお方が入いらつしやるんだから此処ここに居いてはいけないよ。野原に居たかつたら居てもいいからずうつと向うの方へ行つてしまつてここから見えないようにするんだぞ。声をたててもいけないぞ。」

私たちは顔を見合せました。そしてだまつて籠を提げて向うへ行こうとしました。

慶次郎がぼいっとおじぎをしましたから私もしました。紺服の役人はメリケン粉のからふくろを手に団子のように捲きつけていました。少し屈むようにしました。

私たちは行こうとしました。すると黒服の役人がうしろからいきなり云いました。

「おいおい。おまえたちはここでその葷をとったのか。」

またかと私はぎくつとしました。けれどもこの時もうしても「いいえ。」と云えませんでした。慶次郎がかすれたような声で「はあ。」と答えたのです。すると役人は二人とも近くへ来て籠の中をのぞきました。

「まだあるだろうな。どこかここらで、沢山ある所をさがしてくれないか。ごほうびをあげるから。」

私たちはすつかり面白くなりました。

「まだ沢山ありますよ。さがしてあげましょう。」私が云いましたら紺服の役人があわてて手をふつて叫びました。

「いやいや、とつてしまつちやいけない、ただある場所をさがして教えてさえくれればいいんだ。さがしてごらん。」

私と慶次郎とはまるで電氣にかかったように萱かやをわけてあるきました。そして私はすぐ初はつ葷たけの三つならんでる所ところを見附みつけました。

「ありました。」叫さけんだのです。

「そうか。」役人たちは来てのぞきました。

「何だ、ただ三つじゃないか。長官ちようかんは六人もご家族かぞくをつれていらつしやるんだ。三つじゃ仕方しかたない、お一人十ずつとしても六十なくちやだめだ。」

「六十ぐらい大丈夫だいじようぶあります。」慶次郎が向うで袖そでで汗あせを拭ふきながら云いました。

「いや、あちこちちらばつたんじやさがし出せない。二とこぐらいに集あつまつてなくちや。」

「初葷はつたけはそんなに集あつまつてないんです。」私も勢いきおいがついて言いました。

「ふうん。そんなにかまわないからおまえたちのとつた葷たけをそこらへ立てておこうかな。」

「それでいいさ。」黒服くろふくのほううすが薄うすいひげをひねりながら答えました。

「おい、お前たちの籠かごの葷たけをみんなよこせ。あとでごほうびはやるからな。」紺服こんふくは笑わらつて云いました。私たちはだまつて籠かごを出したのです。二人はしやがんで籠かごを倒さかにして数かずを数かずえてから小さいのはみんなまた籠かごにもどりました。

「丁度ちやうどいいよ、七十ある。こいつをここらへ立ててこう。」

紺服の人はきのこを草の間に立てようとしましたがすぐ傾かたむいてしまいました。

「ああ、萱かやくしで串くしにしておけばいいよ。そら、こんな工合ぐあいに。」黒服くろふくは云いいながら萱の穂ほを一寸すんばかりにちぎって地面じめんに刺さしてその上にきのこの脚あしをまつすぐに刺して立てました。「うまい、うまい、丁度ちやうどいい、おい、おまえたち、萱の穂をこれぐらいの長さにちぎつてくれ。」

私わたくしたちはとうとう笑わらいました。役人やくにんも笑わらっていました。間もなく役人たちは私たちのやった萱の穂をすっかりその辺へんに植うえて上にみんな蕈きのこをつき刺さしました。実じつに見事みごとにはありませんでしたがまたおかしかったのです。第一だいいち萱かやくしが倒たおれていましたしきのこのちぎれた脚も見えていました。私どもは笑わらって見ていますと黒服の役人がむずかしい顔をして云いいました。

「さあ、お前たちもう行いつてくれ、この袋ふくろはやるよ。」

「うん、そうだ、そら、ごほうびだよ。」二人はメリケン粉この袋を私たちに投なげました。

そんなもの要いらないと私たちは思おもいましたが役人がまたまじめになつて恐こわくなりましたからだまつて受け取とりました。そして林を出いました。林を出るときちよつとふりかえつて見みましたら二人がまつすぐに立つてしきりにそのこしらえた蕈の公園をながめているよう

でしたが間もなく、

「だめだよ、きのこのほうはやつぱりだめだ。もし知れたら大へんだ。」

「うん、どうもあぶないと僕も思った。こつちは止そう。とつてしまおう。その辺へかくしておいてあとで我われがとつたということにしてお嬢さんにでも上げればいいじゃないか。そのほうが安全だよ。」というのがはつきり聞えました。私たちはまた顔を見合せました。

そして思わずふき出してしまいました。

それから一目散に遁げました。

けれどももう役人は追つて来ませんでした。その日の晩方おそく私たちはひどくまわりみちをしてうちへ帰りましたが東北長官はひるころ野原へ着いて夕方まで家族といっしょに大へん面白く遊んで帰つたということを聞きました。その次の年私どもは町の中学校に入りましたがあの二人の役人にも時々あいました。二人はステッキをふつたり包みをかかえたりまた競馬などで酔つて顔を赤くして叫んだりしていました。私たちはちやんとおぼえていたのです。けれども向うではいつも、どうも見たことのある子供だが思い出せないというような顔をするのでした。



## 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 二人の役人

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>